



某寺の僧侶に成就坊と言うのがあり、いつ頃からか津民城主野仲重兼の恩ちょうを受けるようになった。

之が大奥に出入りするようになってから、風紀が乱れ、文武両道に秀で仁君と謳われた、殿の生活に朱血肉林のきざしが見え始めたのである。

城井城主宇都宮の庇護を受け、野仲郷のみならず、下毛一円を支配するこの野仲家の一大事として、家老百富河内守は心中甚だ心配したのであった。この有様を見るに見かねて、成就坊に忠告を試みたのが、渡辺宗雅と言う、忠義一徹の家臣である。

これは成就坊の反感を買い、ざん言によって、殿の憎悪も受けたのである。それから「宗雅は、喜多坊の恨みを晴らす為に、殿に弓を引く考えらしい」との噂が飛んだ。喜多坊と言うのは、以前殿の気嫌をそこねて、追放され、山中に遁れて、食を断って世を去った社僧である。

日と共に激しくなってきた、殿の庶政を顧みざる振舞に最も心を悩ましたのは、百富河内守ら忠臣であり、最も悦んだのは成就坊一味であった。その対立があらわになって来た空気の中である日、不図した事から宗雅に気嫌をそこねてしまった重兼は、成就坊に命じて、ひどく面ばさせた事があった。

この時、武勇衆に秀でた弟宗教は、宗雅のその屈辱を甘んじて受ける忍従に態度に業をにやして、殿中で成就坊に刀傷の沙汰に及んだ。宗雅宗教兄弟は、殿より死を賜わり、春に魁けて命を散らしたのである。

それから真もなく息女芳姫が原因不明の病気にかかった。たった一人の姫の病気に心痛したのは重兼であった。食欲が進まず、顔色蒼白、時に泣き、時に笑い、魂の抜けた蠟人形のごとき姫であった。あらゆる名医の診断も要領を得ず、名薬も効を奏せず、日増しに衰えて行くのである。

寝たり、起きたりで病床を離れる事の出来ない、姫の部屋に妖雲が漂うとか、変化が現れるとか云う噂が流布されたが、それは成就坊が加持祈祷によって、不思議にもぴったりと止んだ。

姫は、或る日重兼を枕頭に呼び近頃病情がよいようにあるから月見をしたいと言った。月皓々（こうこう）と冴え渡り、山国川の机淵を照らしている天正七年のある夏の夜、数多くの権門従臣を集め、侍女を随えた、観月の遊宴であった。美しく装われた数多くの船にはぼんぼりが下げられ、そろいの衣装をつけた女たちの踊るさまを手にとる様に眺めた姫は、久し振りに満悦の表情を見せた様だった。その豪華は正に竜宮城の再来である。

その観楽の最中、突如として暗雲低迷し落鳴、暴風、大雨、一瞬にして修羅場と化したのである。姫はそれを待ち受けていたかのように、やにわに淵に身を踊らしたのである。重兼は驚いて「誰か姫を・・・。」と大音声に叫んだが、無気味にも、それに応ずる家来の声は聞こえないのである。狂乱の如く重兼は自ら怒涛の中に飛び込み、息女を抱いたのであった。命絶えだえになった重兼は、川下なる垂が松に引っ掛かって扶(たす)かったのである。間もなく蘇生した重兼は、芳姫の屍に身も心もなく、男泣きに泣いて悔悟の涙に暮れたのであった。

観楽極まりて後の哀愁でもあり、生来の野性と熱情がよみがえったとも言えよう。成就坊を斥(しりぞ)けて、只芳姫(原書管姫)のめい福を祈って晩年を送ったのであるが、健康がすぐれず、不運だったと伝えられている。(完)